わたしのフォトメモ ―― ディテール編

山名善之 =文・写真
YOSHIYUKI YAMANA

セーヌ川岸に建つ温室建築（ジャルダン・デュ・イヴェール）

セーヌ川に架かる橋ポン・ヌフ。その橋を右岸に渡った所に「サマリテーヌ・デパート」はある。作家エミール・ゾラの小説『ボヌール・デ・ダム百貨店』が1883年に出版され、消費社会の権化とも呼ぶべき“デパート”の実態が克明に描き出された頃、このサマリテーヌ・デパートは誕生した。世界最古の百貨店とされる「ボン・マルシェ百貨店」（1874）の他、パリには「プランタン」（1881）、「ギャラリ・ラファイエット」（1906）などの百貨店があり、19世紀鉄骨建築の逸品を多く見ることができる。

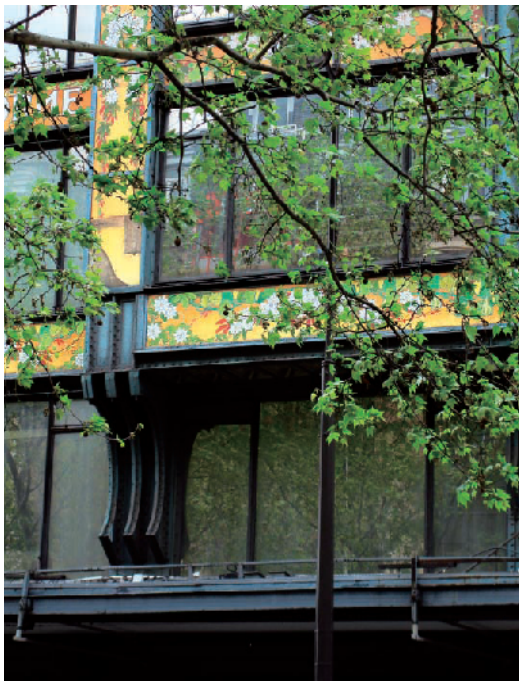
1870年にE.コニャックとM.L.ジェイ夫人によって創業されたサマリテーヌ・デパートは業務拡張を続け、サロン・ドートンヌの重鎮でもあったフランツ・ジュルダンの設計による「一号館」（1885）を皮切りに、その後、後継者である建築家アンリ・ソヴァージュによって設計されたセーヌ川岸の「新館」（1926〜28）に至るまで多くが増築されていった。

橋などを中心に活躍していたG.エッフェルにより製作・施工されたボン・マルシェ百貨店に対し、サマリテーヌ・デパートの一連の建物は、シュワルツ・オモンという温室の製作・施工をしていたアトリエによってつくられてきた。シュワルツ・オモン・アトリエはその起源を1840年までさかのぼることができるが、1867年のパリ万博における「クリスタル・パレス」（1851）など、19世紀フランスにおける温室の歴史において輝かしい足跡を残している。

そのようなことを考えながら、サマリテーヌ・デパートのディテールを眺めてみると、温室製作の際に開発されてきた細工を随所に見ることができる。プリズム・ブロックによるガラス床、鉄骨と一体となったサッシュによるガラス受け、開口部ディテール、暖房システム、結露受け…。

「現代いうところの鉄とガラスのすべての建築物の根源は、温室なのである」[＊]

まさにA.G.マイアーのこのテキストを、サマリテーヌ・デパートのディテールから理解することができる。



左――サッシュと一体化した構造体　温室開口部のディテールが応用されている
右上――サマリテーヌ・デパート（1906〜07施工部分）
右下――サマリテーヌ・デパート新館　乾式工法の技術を追求した当時の話題作

[＊] A.G.マイアー「鉄骨建築」（『パサージュ論 1』W.ベンヤミン著、今村仁司他訳（岩波書店　1993））

やまな・よしゆき――東京理科大学 准教授・フランス政府公認建築家 dplg／1966年生まれ。1990年、東京理科大学卒業後、香山アトリエを経て、フランス政府給費留学生としてパリ建築大学ベルヴィル校で学ぶ。1998年、パリ大学Ⅰパンテオン・ソルボンヌ校博士課程DEA学位取得。博士（パリ大学Ⅰ。アンリ・シリアニ・アトリエ（文化庁在外芸術家研修員）、ナント建築大学講師などを経て、現職。
主な作品：飯能K邸（2000）、南馬込K邸（2005）など。
主な著書：『ジャン・プルーヴェ』（日本語版監修、TOTO出版　2004）、『ル・コルビュジエ サヴォア邸』（パナナブックス　2007）など。